平野先生

草木　政太郎

一　鍵が消える

「こんにちは」と言って平野和夫は職員室に入った。
職員室には永島昇と教頭がそれぞれの自席に座っていた。
平野は自分の席に行き、持って来たカバンからノートや筆記道具を取り出し、空になったカバンやコートとロッカーの鍵を持って、洗面台に近い空き机にその荷物を置いた。
平野は空き机の向かい側で立ち上がった永島に軽く会釈をして、窓側にある洗面台で手を洗った。
自宅から電車に乗って一時間半ほどかけて職場に着いた平野は、洗面台の鏡に映った自分の顔を見て一息ついた。
平野は空き机に置いた荷物を持って、職員室を出たすぐのところにあるロッカーに置くために職員室を出た。
空き机の向かい側に立っていた永島は、空き机の上に鍵があるのに気がついた。
永島はその鍵をさっと自分のポケットに入れた。
平野はロッカーを開けようとしたところで、鍵がないのに気がついて、空き机に戻った。しかし、そこには鍵がない。平野は念のため自分の席の机を見たが鍵はない。平野は空き机のところに戻った。
まだ永島は空き机をはさんだ向こう側に立っていたので、平野は永島のほうを見て、「ここに鍵をおいたのですが、どなたか知りませんか」と聞いた。
永島は、自分を名指して聞いているのではないので、平野と目を合わさずに黙ったまま、そばの永島の席に座った。
わずか一分もしないうちに鍵がなくなってしまうとは、職員室は無法地帯と変わらないと思ったが、平野はどうすることも出来なかった。
これは平野がこの学校に異動してから三年目のことであった。
平野は鍵がなくなったのだから、ロッカーの錠前ごと新しいものに取り替えるし

かないと考えた。
次の日、平野は事務室に行ったら、たまたま学校に出入りしている業者の人がいたので、ロッカーの錠前を新しいものに取り替えて欲しいと注文した。
鍵のないロッカーはしばらく使えない状態が続いたが、一週間後に新しい錠前が取り付けられた。業者の人は事務に話して費用は学校から出してもらえばいいのにと言ったが、平野は、「鍵は自分の責任で預かっていたのだから」と言って、錠前の費用は平野が自前で支払った。

二　映画会

平野と永島が勤めている学校は公立の定時制高校の普通科で、都心と郊外の中間に位置していた。
一九八〇年代の、この定時制高校は四年制で各学年は二学級ずつあり、全校生徒は約二百名ほどであった。授業は夕方五時二十分から九時までの四十五分の四時限授業で、一、二時限目の間に給食があった。
学校は全日制と併設で校長は同じだが、教職員は別組織で、定時制は教頭、養護教諭を含めて常勤の教員は十四名で、他に非常勤の講師が数名と、司書、事務や給食関係の職員がいた。
平野がこの学校に異動して来たとき、永島はすでに二年前から勤めていて、何事にも口を出す、この学校の主のような存在であった。
平野は理科、永島は数学の教員で、平野と永島は同じ大学の卒業で、永島が先輩であった。
永島は平野に「友達は裏切っちゃいけない」と話し、「僕は教育委員会の指導主事を知っている」とか、「僕はこういう時、バーンと言ってやった」とよく話していた。
五月一日のメーデーの日、職免といって仕事を免除されてメーデーに半数の教員が参加して、残りの半数の教員が生徒に対応するのだが、その日は二時間の授業の後、生徒総会を予定していた。

この予定で良いかどうかを検討する議題が職員会議であった。
このとき、平野は異動してきてすぐの時であったので、意見を控えようかとの思いもあった。しかし、平野はこれまで十年以上、教員を務めている。今までの経験から、正しいと思っていることを発言した方が良いと考えて、手を上げて発言した。
生徒総会は全教員が揃っている時に行い、生徒総会を通して生徒の実態やら問題点を全教員が分かるようにした方がよい。五月一日は、二時間の授業の後、生徒総会ではなくたとえば映画を見せたらどうかとう提案であった。
平野は異動してきたばかりだから、平野の提案は通らないだろうと思っていたが、採決の結果は、賛成多数で平野の提案が決まった。
これまでのやり方でやってきた永島は、面目丸つぶれと受け取った。
永島は、何にでも口を出していたが、映画をやることに決まったこの件は非協力を決め込んだ。
平野は仕方なく教頭の協力を得て、学校用の視聴覚の映画のなかから選んで、メーデー当日は二時間授業のあと全校生徒を食堂に集めて、十六ミリ映写機を操作して見せた。
食堂いっぱいに集まった生徒達は静かに映画を見て無事終了した。
異動してきたばかりの平野が、新しいことを提案しても、失敗するだろうと、永島はみていたが、そうではなかった。

平野は異動して二年目に入ったとき、これまで生徒の喫煙に対する指導は一回目の喫煙を見つけたとき、一週間の謹慎となっているが、せめて謹慎を三日間にしよう。また、見回りをして喫煙をさせないようにしようと提案した。採決の結果、この案通りに決まった。

平野が異動して来てから二年間は、永島と平野は職場の数人と一緒にスキーに出かけたりして、表面上は二人はいい関係であった。
しかし、平野が異動して来た時から、それまでのやり方に対して、平野は新しい提案をして、それが職場に受け入れられていることや、平野が仕事をそつなくこなすので、永島は平野を面白く思わなくなっていた。

定時制は夕方から授業が始まり、授業と授業の間の休み時間が五分と短くあわただしく、授業はもちろんのこと、欠席がちの生徒に対する注意、放課後は教室の掃除の指導と点検、生徒の面談、クラブ活動の指導など、生徒が学校にいる時間が短い分、することが圧縮していてあわただしかった。

教員同士はゆっくり話す時間がとりにくく、教員間の交流は不活発であった。

そんな中で、平野のとなりの席に座っている体育の村井は、球技大会や文化祭など大きな行事が終わるたびに、勤務が終わってから、飲み会に行こうと声をかけ、それが教職員間のつながりを作っていた。

しかし、その体育の村井は本人の希望により定年を少し前にして退職することになった。

平野は本校に来てからの三年間、職場の和を大切にする村井から学ぶことが多く、村井が退職するのを残念に思った。

この年度末は、理科の二人の教員も異動することになった。

三　教員としては致命的

四月の新学期になって、校長から異動して来る教員が発表された。体育の村井の後任は、別の全日制高校から異動してきた箱本と新規採用の中村、理科は新規採用の秋田で、異動して出た教員も、入って来た教員もすべて男の教員であった。教科担当の教員十二名のうち、女の教員は英語と社会の二名だけであった。

新学期の四月は新しく入学してきた一年生や転編入生を迎えて、学校全体が活気につつまれる。

一年生の担任をはじめ、すべての教職員がかかわって、新入生や転編入生に、学校生活の決まり事を話し、図書館の利用方法、給食の取り方やクラブ活動の紹介などが行われる。

新入生達はだんだんに学校生活になれてきて、落ち着いた雰囲気の中で授業が行われた。

一学期の終業式が終わり、夏休みに入ると、日直の仕事や部活の指導はあるが、時間的なゆとりが出来る。

平野にやっかみを感じていた永島は、この時期に、平野が中村の悪口を言ってもいないのに言ったといい、やってないことをやったと話して、中村に平野を嫌わせ、平野が教員としていかに良くないかと思わせる話を中村にした。

「去年、全日制でビデオデッキがなくなった時、平野はビデオデッキを持っていると言った。しかし、ビデオデッキがなくなる前、私は平野の引越を手伝った。そのとき、平野の引越荷物にビデオデッキはなかった」おかしいでしょうと、永島は、平野を疑わせるように中村に話をした。

前の年、全日制でビデオデッキが紛失した話があったが、全日制で紛失したビデオデッキは旧式のものでテープを上から入れる方式であった。

平野が持っているのは、メーカーは同じだがフロントローディングといってテープを前面から挿入出来る新式であった。

全日制のビデオデッキが紛失した話があった時、平野は永島に、「紛失したビデオデッキと同じメーカーのビデオデッキを持っているが、紛失したビデオデッキは旧式で、私のは新式だ」と話し始めた時、永島は平野の話しを最後まで聞こうとはせず、途中でその場を離れて行った。

平野が『ビデオデッキを持っている』と言ったことは、平野の攻撃材料に使えると永島は考えて、それ以上の話はどうでもよかった。

永島が平野の引越を手伝ったことも確かだが、平野が引っ越す先は平野の実家であった。

引越が決まってから、平野は振動に弱いビデオデッキやオーディオ類や貴重品を、事前に、自分の車で実家に運んでいた。

引越が終わった後、永島と平野は平野の実家のソファで少しの時間休んだ。実家には、平野が両親に買った大きなテレビがあり、テレビの上に引越の前に運んだビデオデッキが置かれていた。

それを、永島は中村に、『私はビデオデッキがなくなる前、平野の引越を手伝った。そのとき、平野の引越荷物にビデオデッキはなかった』と話すのだった。

当時、職場で、全日制のビデオデッキが紛失した件は平野が怪しいという話はなかったし、定時制の教頭は、全日制でビデオデッキが紛失した件は全日制の問題だから全日制で処理すると話していた。

夏休みが終わって九月、久しぶりに勤務の終了後、学校から少し離れた飲食店で飲み会を行った。十人ぐらいの同僚達は、三四人ずつが三つのテーブルを囲んで飲み食いした。ほどよく酔いが回り、何人かが席を入れ替わった。

平野は秋田と中村のテーブルに来た。三人が一つのテーブルで顔を合わせるのは初めてだった。ビールをつぎあったところで、中村は平野のことを、「こうして飲んでいるところを、ほかから見ていると二人は仲が良さそうに見えるでしょう。だけどそうじゃない」と言った。

平野は中村を一度も悪く言ったことがないので、何でそう言われるのか分からなかった。

続けて中村は平野について、「教員としては致命的」といった。

平野は突然そう言われて耳を疑った。

平野は誠実に教員の仕事をしていると自負していたし、平野は今までそんなことを言われたことはなかった。

中村はこの学校に来てからまだ何ヶ月も経っていないのだ。中村が何でそこまで言えるのか、何を根拠にしているのか、平野はよっぽど何か言おうと考えた。

しかし、平野は相手が上司であったら、直ぐに反論するところだったが、中村はまだ新米だし、飲んだ席での議論は避けたいという気持ちが働いて、後日、しらふの時に話せばよいと考え、平野は中村を睨みつけただけであった。

後日、平野は中村に、なんで平野が教員としては致命的なのかと聞こうとしたが、こういう話は聞きづらくて、結局、聞けなかった。

二年前、平野が担任をしているとき、こういうことがあった。

平野が担任をしている生徒が、授業の開始のベルが鳴ったにもかかわらず、職員室の平野の席に来て、「先生、話を聞いてくれ」と話を始めた。

「自分の前では良いことしか言わないのに、自分のいないところでは悪く言っている。そういう人がいるのだけれど、先生どうしたらいい?」ということであった。

平野は、「そんな人がいるのか。困った人がいるものだね」と言って、早く授業に出なさいと、教室に戻るように言った。

生徒は、「先生、僕は言葉だけでは死なないよ」と言って教室に戻った。

平野はこの生徒を感受性の強い正義感のあふれた活発な生徒だと評価していた。平野は生徒のいないところで、生徒を悪く言うことはないので、まさか平野のことを言っているとは、すぐには気がつかなかった。

結局、それは、永島が授業中に、その生徒に、「担任の平野先生がお前のことをあんなうるさい奴、いなければいいのにと言っていたぞ」と、平野が言ってもいないことを話していたことが分かった。

このときは、生徒が、『先生、話を聞いてくれ』と平野に言いに来たので分かった。

しかし、永島からの情報源だけで、教員の中村がそれを鵜呑みにして、『こうして飲んでいるところを、ほかから見ていると二人は仲が良さそうに見えるでしょう。だけどそうじゃない』と言ったり、『教員としては致命的』と言っているのだったら、中村の姿勢にも問題があると平野は考えた。

四　うるさい

それから二年経った三学期の二月、定時制の授業が始まる前に、永島は特に用事があったわけではないが事務室に入ってみると、平野が事務の年配の小林と親しそうに話をしていた。

永島にとって事務室は自分の縄張りと認識していたから、平野が事務室にいることは面白くなかった。

永島は平野から離れた所で、大きな声を出して、「平野さん」、「平野さん」と繰り返し呼んだ。以前もこうして、平野の話を中断させたことがあった。

平野は、永島の呼び掛けに応えようと顔を上げたが、年配の小林と話しているのを中断出来ないでいた。

夕方の時間帯で事務室全体にいろんな声が飛び交っていた。

その中で、永島は執拗に何回も、何回も、「平野さん」と繰り返した。

あまりの騒々しさで、小林の話が聞き取れなくなった平野は急に立ち上がって、「うるさい」と言った。

事務室は相変わらずざわざわしていて、誰も平野の言ったことに注目する人はいなかったようだった。

しかし、永島は平野の意外な言葉に驚き、生意気だと思い、自尊心を傷つけられたと受け取った。平野をただではおかないと決心した。

平野と話していた小林は、平野に質問されたことを丁寧に一生懸命に話していたのに、平野が立ち上がって『うるさい』と言ったのは、自分が言われたのかと思い、話を止めて平野を睨みつけた。平野は、小林さんに言ったのではないと言おうとしたが、もう平野の話を聞く雰囲気ではなかった。平野は小林に頭を下げて事務室を出て、職員室に戻った。

しばらくして、定時制の一時限目の授業が始まった。

平野と永島は、一時限目の授業が終わった休み時間に、職員室前の廊下でばったり出会った。

二人は無言のままであった。

永島は『うるさい』言われたことに腹を立て、生意気な平野の奴、今にひどい目にあわせてやるからなと考えていたが顔には出さないでいた。

平野は、永島に思わず、『うるさい』と言ってしまったが、人が話を聞いている最中に、なんであんなに繰り返し名前を呼んだのか、話したい用件があるのなら、今、何か言うのかなと思って、少しの間、待っていた。

しかし、永島は少しの沈黙のあと何も言わず、廊下を歩いて行った。

それから、数か月後、職員室で放課後、永島や中村達が、学校の先生の子供はよい生徒なのだろうかと話していた。

平野はこの永島たちの話に参加しても言葉尻はとられないだろうと思い、「一般的に、学校の先生の子供は、必ずしも良くないと言われていますよ。私も前の学校で、手を焼いた生徒の親が学校の先生だったことがありました」と話した。

しかし、平野の発言に、永島たちは話に乗って来なかった。

この話はこれで終わりのはずであったが、『うるさい』と言われた仕返しを考えていた永島は、親が先生をしている生徒を探した。

数日後、永島は父親が学校の先生をしている生徒を見つけ、「平野先生が、学校の先生の息子は悪いのが多いと、お前のことを言っていたよ」と、平野が言っていないことを話した。永島はこの生徒が平野に反発し、平野がどんなふうに困るか楽しみにしていた。

その後、平野が出ている教室で、これまで授業内容に興味を持ってよく質問をしていた生徒が、授業が始まっても教室の一番後ろで椅子を二つ三つ並べて仰向けに寝ていた。

平野は注意をして起こした。しかし、それ以降の授業は寝たり、話をしたりして、今までの授業態度とはまるで変わった。

平野はなぜこの生徒が急に態度を変えたのか分からなかった。

だいぶ時間が経ってから、平野は授業態度を急に変えた生徒が学校の先生の息子であることに気がついた。

平野はこの生徒のことは何も言っていなかったのに、永島がその生徒に、平野が言っていないことを言ったと話したのではないかと疑った。

平野はこういう陰で動くやり方にどう対応すればよいのか困惑した。

平野は国語の西山や英語の渡辺と居酒屋に寄ることが多くなっていた。

西山は行きつけの飲み屋があって、どこの店は何がおいしいとよく知っていた。

渡辺は大食漢で、ある豚カツ屋の常連になっていた。飲み食いしながら話すことは、職場の話や世間話であったが、当たり障りのない話をしていた。

五　生徒の忘れ物

それから間もない、二月初旬の放課後、夜の十時頃であった。

職員室には、平野と、少し離れた席に永島と中村がいた。

そこへ電話がかかってきて、平野が出た。平野が担任をしている岩田幹男からの電話だった。

「先生、どこでなくしたかは分からないのですが、今日もらった給料がないのです。学校以外でなくした可能性が大きいのですが、念のため教室の机の中を見てくれませんか」

ということであった。

学校以外でなくした可能性が大きいということで、平野は少し気を楽にして、「お金はいくら入っているの」と聞いた。

岩田は、「十五万円ぐらい」と言ったので、「えっ、十五万円。そんな大金」と、平野は確認する意味で声を出して復唱した。

すると、平野の電話を聞いていた永島は、「えっ！」と大きな声を出し、大変だと大袈裟に驚いて見せた。

永島がそんなに驚いて見せるのは、平野は信用できないから大変だと、中村に見せる演技であった。

平野は放課後、教室を見に行った時の様子を思い出していた。黒板の板書は消されていて、机も大体きれいに並んでいて、ゴミもお金もなかった。

平野は、「放課後、教室の掃除の具合を見に行ったけれど、見なかったよ。机はどの辺？」と聞いた。

岩田は、「廊下側から三列目で、後ろから二つ目です」

平野は、「今すぐ見に行くから待っててね」と受話器を置いて、平野は小走りに教室へ向かった。

永島は頼まれてもいないのに、わざと慌てた様子で平野のあとを追った。

教室に着いた平野は岩田の言った廊下側の机の中を見たが空っぽだった。それで他の机の中も順番に見ていった。ほとんど同時に教室に着いた永島は窓側の机から順番に見ていった。

結果的には、平野が教室の廊下側の半分の机の中を、永島は窓側からの残り半分の机の中を見たことになった。その間、平野と永島は一言も口をきかなかった。

平野は電話に戻り、岩田に、なかったことを伝えた。

平野は帰り支度を終えると、「お先に失礼」と言って帰路についた。

職員室には、永島と中村だけになった。

『うるさい』と言われた仕返しはまだ足りないと考えていた永島は、平野を困らせるチャンスだと考えていた。

永島は、平野について行った教室で、うそでも平野は机の中からお金を盗ったと言えば、目撃証言となり、平野を窮地に追い込むことが出来ると考えた。しかし、なぜそのとき注意しなかったのかと永島が攻められては困る。

そこで、平野が電話で、放課後、教室の掃除の具合を見に行ったと言っていたから、そのとき盗った可能性が大きいと、中村に話すことを決めた。

永島が大きな声を出して驚いて、教室に慌ててついて行った様子を見ていた中村は、永島の話を聞いて、平野が生徒の忘れた金を盗ったに違いないと考えた。

翌日、授業前の職員の打合せで、平野は昨日の岩田の件を報告した。

この報告に質問は何もなかった。

永島と中村は、昨日電話をかけてきたのは平野が担任をしている岩田だと初めて知った。

永島は中村と話し合い、二人が岩田に、『担任は盗み癖があるので、岩田の金を盗った可能性がある』と話すことを決めた。

岩田は当初、お金は学校以外でなくした可能性が大きいと思っていたが、永島と中村から話を聞いた岩田は、二人の先生が言うのだから、やっぱりお金は学校に置き忘れていて、担任がそのお金を盗ったのかなと思った。

この『担任が岩田のお金を盗った可能性がある』という話は、永島、中村と岩田の三人だけの話で、平野をはじめ職員室の他の職員には伝わっていかなかった。

それから一ヶ月ほどした三月のはじめの放課後、岩田が職員室の平野の席まで来て、「先生、引越をするのだけど、手伝ってくれませんか」と言ってきた。

生徒からそんなことを頼まれたことがなかった平野は、誰か友達に頼めないのかと話した。

岩田は頼む友達がいないと言い、「引越をするにも、この前、お金を無くしたので引っ越し屋さんに頼めないのです」と話した。続けて、「先生、車を持っていますか」と聞いた。

平野が、「持っているよ」と言うと、岩田は、「お金がないから、先生の車で荷物を運んで欲しいのです。お願いします」と言った。

平野はなかなか手伝うとは言わなかったが、生徒がどんなところに住んで生活をしているのかを知るのも教員の仕事としてよいかもしれないと自分に言い聞かせて、「分かった。手伝おう」と言った。

こうして、平野は田舎から単身上京している岩田の引越荷物を運んであげた。

岩田が担任の平野に頼みに来るのはこれで終わりではなかった。
六月のはじめの放課後、職員室の平野にお金を借りに来た。授業料や給食費など納入費が払えないから、六万円を貸してくれということであった。平野はいつまでに返すのかと聞いた。七月の終業式までに三万円、九月までに残りの三万円を返しますと約束した。生徒同士のお金の借り貸しは禁止しているので、平野は紙切れに借用書を書かせて貸した。
しかし、終業式にも、九月が過ぎても、岩田は返しに来なかった。
平野は岩田を真面目な生徒だと評価していた。返したくても返せない岩田に返金を催促するのは気の毒だと判断して、返金の催促はしなかった。
その後、二度にわたって岩田は平野に合わせて九万円を借りに来た。
これは、岩田が、永島と中村から、借りたお金を返せと言われないのは、担任が岩田のお金を持っているからに違いないと言われてのことであった。
そうとは知らず､平野は岩田を信用して､卒業したら出来るだけ早く返すに決まっていると思い、借用書を書かせ、合わせて九万円を貸した。

卒業式が終わってから、岩田から、貸したお金の返済の連絡がいつ来るだろうかと、平野は待っていた。
しかし、卒業してから三ヶ月が経っても、岩田から連絡がなかった。
平野は岩田に電話をかけたが、何回かけても電話が通じない。
やむなく平野は岩田の田舎の実家に電話をした。家の人が出たので、息子さんにお金を貸したがまだ返してもらっていないと話した。
その後、岩田から、はがきが来た。『今元気にしています。お金はこれから少しずつ返済します』と書いてあった。
しかし、一ヶ月待っても、いっこうに返してこなかった。
平野は再び、実家に電話連絡をとった。
すると、十日ほどして、岩田から手紙が送られてきた。一万円が同封されていて、『残金十四万円を少しずつではありますが返済します』と書いてあった。しかし、住所は書いてなく、スタンプから投函場所が分かるだけであった。
これを見て、平野は、岩田はこれ以上は返す気がないのだと感じた。
平野は岩田を真面目な生徒だと信じていたが、二度三度、お金を借りに来たとき、

もっと事情を聞けばよかったと反省した。

六　西山の話

平野と中村は同じ学年の二クラスの担任を組んで四年目になっていた。
五月下旬に修学旅行がある。
四月のある日、仕事が終わって、平野は警備員室で警備員と囲碁を打っていた。
永島と中村が揃って職員室から出て、警備員室を覗くと平野と警備員が囲碁を打っているのが見えた。永島は中村に「ちょっと見ていくから先に帰ってくれ」と言って、警備員室に入った。永島は、こういうときに平野と話をして、『平野から中村の悪口を聞いているんだ』と中村に思わせるための演技であった。
平野と警備員の囲碁は早碁で十五分もしないうちに一局が終わった。
永島は平野と学校を出て帰路についた。駅まで一緒で、別々の方向の電車に乗った。その間、二人は何も話さなかった。電車が入って来たとき、永島は線路越しに、二度三度、頭を下げて挨拶の素振りをして、平野の反応をうかがった。

修学旅行に行く前の日、平野と中村は修学旅行旅行の準備をすべて終えた。
まだ職員室に残っていた中村と永島に、平野はお先にと挨拶をして帰った。
二人だけになった職員室で、永島は、修学旅行の中村のクラスの参加者が、平野のクラスの参加者より三名ほど少ないのを知って、「平野さんが、担任がだめなやつだから中村のクラスの参加者は少ないんだと話していたよ」と、中村が気にしそうな作り話をした。
これを聞いた中村は、それを鵜呑みにして、平野に怒りを感じた。

次の日、修学旅行の当日、集合場所で、平野が中村に、「おはようございます」と挨拶をすると、中村は目を合わさず何も答えなかった。
中村は独断で、一方的に生徒に指示を出して行動した。
修学旅行の引率は、二人の担任と教頭の三人でするのだが、二ヶ月前、平野は中村と修学旅行の下見に行ったときは、二人で気を合わせて、どのように引率するかを確認して、上手くいっていたのに、平野はその変わりように驚いた。

平野はあれこれ考え、二人の担任が話し合って引率するのは難しいと考えて、生徒に指示するのは、午前と午後で分担しようと中村に提案して、そのように分担して、二泊三日の修学旅行を無事終えた。

修学旅行が終わってしばらくした六月、仕事の帰りに、平野は西山と居酒屋に寄って飲んだ。
西山はめずらしく、こういう話をした。「永島さんに何か言ってやんなくちゃ。あれじゃ、中村さんと担任を上手くやっていける訳がないよ」
西山は、永島が中村に話しているところに居合わせたようであった。
永島の影響で中村にやりにくさを感じていた平野は、今頃、西山はそんなことを知ったのかと思い、具体的にどんな話だったのかと聞かないで、焼き鳥を食べ、焼酎を飲んだ。
西山もそれ以上、この話は言わず、飲み食いして、当たり障りのない話をした。

しばらくしてから、永島のクラスでいじめがあって、どのように指導をするかと職員会議の議題になった。
永島はいじめられている生徒の方に問題があるから、いじめられたのだと言った。
他の教員が黙っている中で、平野は、いじめは、いじめている方が悪いし問題があると発言した。
それからしばらくして、こういうことがあった。
平野は授業で観望時期に天体望遠鏡で木星、土星、金星や月などを見せていた。天体望遠鏡を一時的に職員室に置くことがあった。
永島はその天体望遠鏡を狂わそうと、時間割を見て、平野がいない時を見計らって、天体望遠鏡に近づき極軸のクランプに手をかけてゆるめ始めた。
この時は時間割変更で平野が居合わせて、平野が、「永島さん、止めて下さい」と言った。永島は手を止めて、黙って自分の席に戻った。

七　ピン札が無くなる

前年度から、平野のとなりの席は、異動した箱本に代わって、新規採用の井上と

いう女の体育の先生の席になっていた。
井上は明るく振る舞っていたが、初めての仕事で井上は気苦労しているのではないかと平野は心配して、平野と飲み付き合いのある国語の西山や英語の渡辺と一緒に井上を誘って、二、三回、帰りに飲みに行ったことがあった。

井上が来て二年が経とうとする三学期のある日、平野が出勤すると、井上の机の引き出しが開いていて、新しい千円札が何枚か揃えられて入っているのが見えていた。
平野は思わず、「引き出しが開けっ放しで千円札が丸見えだ」と言った。
職員室には何人かの教員がいたが、目があった秋田に話すような形になっていた。
平野は「あぶないから閉めておこう」と言いながら、すぐに引き出しを閉めた。
秋田は職員室の中央の通路の向こう側の秋田の席から平野のほうを見ていた。
見ていたといっても、平野の席の前の席には本立ての上に書類が積まれているので、秋田は平野の顔と胸までしか見えなかった。
秋田は、平野の引き出しを閉める音を聞いて、何も言わず自分の席に座った。
このとき、永島は職員室の自分の席に座ってこの様子をうかがっていた。

井上は出勤したあとは体育教官室にいることが多く、この日も放課後、クラブ活動の世話で遅い時間になって、職員室の自席に戻ってきた。井上は引き出しを開けると、入れていた千円札のピン札三枚が無いのに気がついた。
「私の引き出しに入れていたピン札三千円が無い」と井上は言った。
このときまだ職員室にいた永島は、「平野さんが盗るのを秋田さんが見たと言っていたよ」と、秋田が言ってもいないことを話した。

次の日、平野が出勤して席に着くと、となりの席で待っていた井上が、「私の引き出しに入れていたピン札三千円が無くなったんですけど知りませんか」と聞いた。
平野は開けっ放しになっていた引き出しを閉めたことを、そのまま言おうかなと思った。
しかし、引き出しを閉めたのに、お金が無くなったなんて変だなと思った。
以前、平野は余計なことを言って永島に嫌な思いをされたことを思い出した。ど

うして無くなったのかは知らないし、係わらない方が無難だと考えて、平野は「知りませんよ」と言った。
井上は再度、知らないかと聞いた。平野は、「はい、知りません」と答えた。
少しの沈黙のあと、井上は、「秋田先生が平野先生が盗るのを見たと言っていましたよ」と言った。
井上がはじめからそう言えば、昨日のことをありのままに話したのに、平野は用心して、知らないと言った手前、何と言えばよいのかと少し迷った。
平野は盗っていないのに、秋田は見るわけがない。
平野は秋田が職員室にいるかどうか見渡したがいない。
以前の平野だったら、秋田を連れてきて、目の前で訂正させるはずだが、なぜかそういう気力がわかなかった。
平野は本当のことは伝わるはずだと考えて、「私はお金を盗っていません」とだけ言った。
井上は黙ったままだった。
平野は再度、はっきり、ゆっくりした口調で、しかし少し情けない気持ちで、「私はやっていません」と言った。
平野は、よっぽど、井上に、『秋田さんから直接聞いたのですか』と聞きたいと思ったが、その前に、「引き出しにお金を入れないで下さい。ここには生徒も沢山来ますよ」と余計なことを言ってしまった。
すると井上は何も言わずに席を立って、職員室を出て行った。
平野は生徒が盗るとは限らないのに、なんでそんなことを言ってしまったのかと悔やんだ。

それから一ヶ月もすると、年度末になって、秋田は職員室の平野の席に来て、別の高校に異動が決まったと挨拶に来た。
その時、平野は秋田に、何で見ていない嘘を言ったのかと聞きたかったが、今はそれを聞く時ではないと思い直し、聞かずじまいになった。
次の年度末に、永島と中村が異動していった。
平野は、卒業学年の四年生の担任に持ち上がる予定の人が異動することになった

ので、その担任を引き継ぐことになった。
平野は修学旅行の引率をして、文化祭でクラスの出し物を生徒と一緒に取り組み、卒業後の進路の世話をして、クラス全員が無事卒業した。平野は、その年度末に異動した。

平野は異動したあと、ピン札が無くなった事件のことが頭から離れなかった。
平野はふと、こういう可能性があることに気がついた。
あの日、永島は、その日の時間割を見て、井上や平野がいない時間帯を調べた。永島は二人ともいない時間に井上の席に来て、引き出しを開けると、すかさず、中にあったピン札三枚をポケットに入れた。これで、平野が、『あぶないから閉めておこう』と言った時に、平野が盗ったことにしようと永島は企んだ。

平野は遅ればせながら、秋田に連絡をとった。平野が盗るのを見たと井上に言ったのは本当なのかと聞いた。秋田はそれを否定した。秋田は他人の物を盗るのを見たのなら、その場で許さないし、それをその時言わないであとになって盗るのを見たなんて言うことは絶対にないということであった。
平野はもっと早く、秋田に聞けばよかったと、自分の愚図さ加減を悔やんだ。